

布村知丈 竹細工士

Tomotake Homura
平成元年卒

筑波大学で彫刻を学び、図書館で手にした竹に
関する本がきっかけで竹という材料に興味を持つ。
卒業後、別府の職業訓練校で竹工芸の基本を学
び、竹工房での仕事に就く。その後独立、現在は
大分で「嶺龍(れいりゅう)」と名乗り竹細工士
として、作品作りに励む。

竹の材料選定にはこだわり、本煤竹を多用する。
時には、囲炉裏の煙で燻され続けた、硬く引縮まっ
た美しい色の本煤竹を手にするため、鋸とパール
を手建築解体現場に足を運ぶこともある。

写真の作品は、昨年の東京修猷会総会でも販売
した緊急用ホイッスル。作品と修猷館とを結びつ
けることに失敗の連続であったが、レーザー加工
機の導入や新しい加工技術を取り入れる等の工
夫を重ね、総会のテーマ「不易流行」を踏まえた
記念品として仕上げた。

独立して16年。当初の思いを大事にしつつ、
周りの状況・自分自身・作品の変化を楽しみなが
らものづくりを続ける。



題字・箱島信一書
発行 修猷館同窓会
東京支部事務局
〒185-0034
東京都国分寺市光町 2-14-85
(有)パルティール内
FAX 042-573-5060
東京修猷会ホームページアドレス
<http://www.shuyu.gr.jp>

不易流行



東京修猷会副会長
伊藤哲朗
(昭和42年卒)

新年明けましておめでとうございます。
館友の皆様には気持ちも新たに清々しい新年をお迎え
のことと思います。

昨年は、母校修猷館で「第十三回全国藩校サミット福
岡大会」という催しが開催され、江戸時代、全国の各藩に
設置された藩校の精神を受け継ぐ各地の方々が集う機会
がありました。

私は残念ながら出席は出来ませんが、修猷館
高校の近くに住んでいるとの理由でその藩校サミットに
参加された方から、修猷館は近くにある学校なので親し
みを感じていた方が、藩校サミットに参加してみても修猷館
開校の経緯や教育の考え方を知る機会を得、修猷館の素
晴らしさを認識したとのご丁寧なお手紙をいただきました。

その方は、他県かつ他校のご出身の方ですが、このイ
ベントを通じて感じられた修猷館についての感想を手紙
の中で次のように述べられています。

一つに、明治十八年、修猷館が「英語専修」を校是とし
て再興された意義と、その結果、外国を知ってやろう、外
国を恐れないという進取の精神や外国と堂々と渡り合う
という気概持つ多くの有為の人材が輩出されたこと。そ
の基本に英語を猛烈に学び自信を持つということがあっ
たこと。

一つに、子弟教育及び英語教育の重要性に着眼した藩
校修猷館出身の金子賢太郎と、これを容れて推し進めた
黒田長溥公の開校に向けての情熱に感銘を受けたこと。

一つに、金子賢太郎が日露戦争終結時に、八年に及ぶ
ハーバード大学をはじめとする米留學の経験をもとに、
米大統領セオドア・ルーズベルトとの友情をはじめ本
質を見抜く見識と誠実な人柄により米国内に多くの知
己、友人を得ていたことが米国の日本に対する助力に結
びついたこと、およびこの間、米国内で百八十回もの講
演を行い、日本に対する米国人の理解を深めたことなど

明治時代にこれだけのことが良くもできたと感動したこ
と。

また、金子賢太郎のことを同窓の神田紅さんがとても
わかりやすく語られていたこともとても良かったと述べ
られていました。

さらに、パネルディスカッションでは、当会副会長の清
田瞭氏のほか、宮本雄二氏、津田純嗣氏の各卒業生が修猷
館の教育について、「自由でおおらか」であり、「自分自
身を確立すること」そして「公に尽くすこと」を教えら
れたと語られていたことが印象深かったこと。

最後に「本当に修猷館は多くの優れた人材を輩出して
いますね。心から敬意を表します」と述べられていまし
た。

このお手紙をいただいて感じたことは、修猷館の素晴
らしさは、私たち卒業生が、母校自慢で「修猷館は良い学
校だ」というだけでなく、藩校以来受け継がれてきた伝
統と先人たちの並々ならぬ努力で、自由な校風の下、自己
を確立することの重要性と進取の精神及び公に尽くすこ
との大切さを、各時代を通じてそれぞれが教えられて来
た学び舎だったからではないかと思うのです。

今回の会報第28号のテーマは、「不易流行」ということ
ですが、時代は移り変わろうとも常に変わらぬもの「修
猷スピリット」とは何かをむしろ他校出身の方から教えら
れる気が致しました。

昨今のわが国を取り巻く状況は、少子高齢化という人
口構造的な課題や経済の低迷もさることながら、近隣諸
国による安全保障面での脅威の拡大や国際環境の変化に
対しての政治外交面における危機意識及び指導理念の欠
如、加えて国民全体に蔓延する、自主独立の精神や外に
打って出ようとする進取の精神の劣化も指摘されていま
す。

藩校以来続く修猷館の伝統や、それを受け継いできた
先人たちの努力や精神に想いを致すとき、私たちはそこ
に受け継ぐべき変わらぬものを見つければならずです。

時代の変化に柔軟に対応しつつ、常に変わらぬ理念を
大切にしながら先人たちの思いを受け継いでいくことこ
そ修猷館で学んだ者の務めでもあらうかと思うのであり
ます。

最後に、皆様にとりまして今年が良い年となりますよ
うお祈り申し上げますとともに、修猷卒業生の益々の活
躍と東京修猷会のさらなる発展を期待して新年のご挨拶
とさせていただきます。

東京修猷会〇二六年活動スケジュール

(二木会は原則6、8、9月を除く
毎月第二木曜日開催)

1月 会報発行 (全会員に送付)

14日(木) 二木会 於：学士会館
10日(水) 二木会 於：学士会館
(第二木曜日が祝日のため、
前日の水曜日に開催)

3月 10日(木) 二木会 於：学士会館
24日(木) 春期常任幹事会

4月 14日(木) 二木会(新入会員歓迎会)
於：学士会館
17日(日) 二木会ゴルフコンペ

5月 12日(木) 二木会 於：学士会館

6月 10日(金) 総会
於ホテルハイアットリージェンシー東京
クリスタルルーム
午後6時より

7月 (幹事学年は平成27年卒)
14日(木) 二木会 於：学士会館

9月 10日(土) サロン・ド・修猷
於：二木会

10月 未定 二木会ゴルフコンペ

11月 13日(木) 二木会 於：学士会館
27日(木) 秋期常任幹事会

12月 10日(木) 二木会 於：学士会館
8日(木) 二木会忘年会

於：未定
二木会では、毎回各界で活躍の卒業
生から貴重なお話しをお聞きします。
皆様、奮ってご参加下さい。

平成27年度東京修猷会総会

昭和から平成へ「不易流行」
平成幹事元年 ガンガン行かんね!

実行委員長 梶栗 健吾(平成元年卒) ガンガン会

「修猷はひとつ!」

これは私たちが高校生時代、特に運動会の時期に先輩方の言葉でよく耳にし、3年生となった私たちもよく口にしたフレーズです。修猷卒業後25年が経ち、東京修猷会総会の学年幹事として取り組んだ約1年半の間、多くの出会いや再会の中でこのフレーズを思い出す機会が何度も訪れました。総会に足を運んでいただいた館友の皆さまも、学年企画「World Wide 館歌(以下、W館歌)」「演舞」「修猷つながり冊子」を通して、修猷の一体感を感じていただけたのではないのでしょうか。

中でも不変の修猷スピリットを伝えられる「館歌」「演舞」を取り上げました。第一部の総会は東京修猷会大須賀頼彦会長、修猷館同窓会橋田敏一副会長、江口善雄館長からご挨拶をいただき、総会をもって顧問に就任された土肥研一前幹事長から事業報告と松尾隆広新幹事長のご紹介をいただきました。

第二部の恩師紹介では、横田一巳先生に「修猷館と館歌」という演題で当時の思い出と修猷生の気質についてご講演いただきました。偶然にも「館歌」を取り上げられたことが学年企画とも共通し、全体の流れが一層繋がりを持つこととなりました。第三部の懇親会は、例年と異なり縦長に使用したメイン会場で、東京修猷会清田瞭副会長の乾杯のご発声によりスタートしました。その直後に会場の照明を落とし、前方の大スクリーンにて上映した「W館歌」「世界24カ国66人の館友が「館歌」を歌い繋ぐ映像は、「知人の登場企画では時代や環境が変化する



前方に大スクリーンを配置した当日の懇親会会場の様子



壇上で挨拶をする梶栗実行委員長

「総会ロス」状態となっている同期が多いガンガン会ですが、出足は決して順風満帆ではなく、「平成卒は本当に大丈夫とや…」と先輩方に心配をお掛けしているという噂が耳に入ってくる状況でした(今考えると、「総会準備という同期が集まる楽しい機会を早く始めるともったいなかった」といって意味だったのかも)。そのうえ、上京して1年の私が実行委員長を引き受けたことで、同期探しが上手く進むか心配した時期もありました。しかし、ずっと会って

ガンガン会ひとつ!

なくても、高校生時代と何ら変わることもなく協力し合える同期の存在は心強く、昔とはまた違う形での絆が強くなっていきました。そして迎えた当日、全国から集まった同期と総会終了後に分ち合えた安堵感と充実感は今も忘れることが出来ません。最後に、今回は例年以上に館友の皆さまのご協力がないと学年企画が成り立たなかった総会でしたが、「W館歌」の映像提供や「修猷つながり冊子」の情報提供をいただいた皆さま、親身にご指導をいただいた執行部の皆さまを始め、多くの館友の皆さまの支えによって、無事に総会を終えることが出来ました。この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

館友の絆のたまもの「修猷つながり冊子」

企画担当 井口 進(平成元年卒) ガンガン会

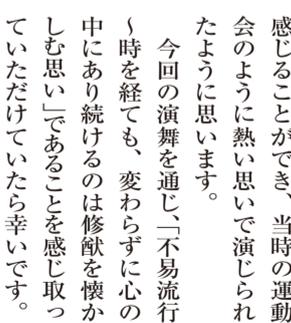
「つながり冊子」は、これまで個別の情報しかなかった、東京近郊で活動する部活動OB・OG会や趣味の集まり等の情報を一つにまとめたものです。企画承認の後、少しずつ情報収集はしていたものの十分には集まらず、「冊子」にはならない状態でした。実行委員からは、「東京を中心に活動している集まりなんて、そう多くないのでは?」とか「我々だけで情報を集めるのは限界がある」と言った声が上がりましたが、大きな壁にぶつかりました。そのような中、実行委員長から「執行部の方々に相談しよう。困った時こそ助けてくれるはず」との助言がありました。そうです。総会会場をひとまわりすると知っている顔に出会うかもしれません。「あんな、なしここにおると?」

演舞「水神の舞」

企画担当 原田 佳代子(平成元年卒) ガンガン会

「総会には毎年十人ほどの同期が顔をそろえますが、今回は普段会えない同期の顔を見るのを楽しみにしていました。「W館歌」ではサンフランシスコ組は出演なりませんでしたが、香港は顔を見ることができました。さて、総会に集えは六百人と交流ができるわけですが、住所が分かっているだけで約五千人が関東在住。街中で偶然の出会いも経験します。今回の総会で後輩に声をかけられました。「〇〇さんをご存知ですか?」もちろん同期たい。その後輩は、私と同様に期待を込めて博多織の六光星名刺入れを使ってお声のかけたのが私の同期だった

同期とは違う縦のつながりを実感させてくれる総会。さまざまな出会いを紡いでくれる歴代の当番学年に感謝しています。



法被と背文字はメンバーによるオリジナル作品

不易流行く時を経て、変わらぬ心の中に残り続けるもの、私にとつてのそれは、運動会の思い出でした。中でも「演舞」は、当時男子のみが出演する事のできた憧れの種目でした。今回、総会の幹事学年を仰せつかり、学年企画立案の話を聞いた時に真っ先に浮かんだのが、「当時の憧れだった演舞を、男女混合で世代を超えて披露できたら」という思いでした。同級生の温かい賛同を受け、年明けから準備を開始した学年企画「演舞く水神の舞」。総会当日。会場の真ん中をぶち抜いての披露は、緊張感と同時に同窓の皆様の視線を間近に感じる事ができ、当時の運動会のように熱い思いで演じられたように思います。今回の演舞を通じ、「不易流行く時を経て、変わらずに心の中にあり続けるのは修猷を懐かしむ思い」であるのを感じ取っていただけたら幸いです。

出合いが楽しみな総会

井手 富士雄(昭和49年卒 4649会)

「つながり冊子」は、これまで個別の情報しかなかった、東京近郊で活動する部活動OB・OG会や趣味の集まり等の情報を一つにまとめたものです。企画承認の後、少しずつ情報収集はしていたものの十分には集まらず、「冊子」にはならない状態でした。実行委員からは、「東京を中心に活動している集まりなんて、そう多くないのでは?」とか「我々だけで情報を集めるのは限界がある」と言った声が上がりましたが、大きな壁にぶつかりました。そのような中、実行委員長から「執行部の方々に相談しよう。困った時こそ助けてくれるはず」との助言がありました。そうです。総会会場をひとまわりすると知っている顔に出会うかもしれません。「あんな、なしここにおると?」

「当時の憧れだった演舞を、男女混合で世代を超えて披露できたら」という思いでした。同級生の温かい賛同を受け、年明けから準備を開始した学年企画「演舞く水神の舞」。総会当日。会場の真ん中をぶち抜いての披露は、緊張感と同時に同窓の皆様の視線を間近に感じる事ができ、当時の運動会のように熱い思いで演じられたように思います。今回の演舞を通じ、「不易流行く時を経て、変わらずに心の中にあり続けるのは修猷を懐かしむ思い」であるのを感じ取っていただけたら幸いです。

東京修猷会2016年度総会のご案内

会場が西新宿に変わります!

テーマ:「フレー! 奮え! 修猷!!!」

6.10

今年も第2金曜日

2016年6月10日(金) 18:00よりホテルハイアットリージェンシー東京 クリスタルルーム

幹事学年:「卒猷会(平成2年卒)」

'16

不易流行く人生をイメージする瞬間

青木 裕子 (昭和44年卒)

「じゃがいも」というあだ名の地理の先生がいた。生徒が「じゃがいも」と先生を呼ぶとカンカンに怒って教室を出て行きその時間は自主勉になった。

ある時、先生が教室に入ってくる。先生の顔をじろりと覗んだ。誰かが「青木やろ」と言った。先生は「青木、お前か」と言う

と、反論する間も与えずに「廊下に出て座るとけ」と命令した。私は塗ったばかりの匂いのむせ返る油引きの廊下に、じっと座った。休み時間に生徒がどやどやと出てきた。私を無視した

風を装って目の前を通っていくのを、けっこう爽快な気分で見送っていた。そのころ女子は全体の十分の一ほどしかおらず、まだ皆おとなしく、そんなわろそ

うはおらんかったはずだ。じゃがいも先生も、そこは分かっている私をやったとは信じなかった、と思う。

だけど、先生は瞬間湯沸器的に怒って、男子と同じように女子に罰を与えた。先生は男子も女子も平等に怒り、対処方法も平等だった。

濡れ衣を着せられたとは言え、手加減されなかったのがなんだか嬉しかった。そして恥ずかし

いと思わない自分に出会い、これから先の人生にある啓示を得たように思う。それから50年という歳月が流れ、私は軽井沢の山の中にいる。定年退職の間に不思議な方向に人生が巡り、浅間山の中腹に

日本で初めての朗読専用のホールを建てることになった。5年前のことだ。その後日本のどこかに同様のホールが出来た話は聞かないので、いかに酔狂な計画だったかが分かると思う。

画だったかが分かると思う。の。つい先日、やっと飲める水が朗読館にきた。飲み水がないと本当に困る。小さな水道組合を作ることが出来、国有林から水をもらってくるようになった。

ここまでの暮らしはサバイバルそのものだった。生活は東京と軽井沢の往復で、一年の内半分は朗読館に付随する居住スペースに寝泊まりしているのだが、風呂は近くの温泉へ。洗濯は山を下ってコインランドリー

へ。飲み水は近くの川へ(本当なのだ)。ついでに泉の水で顔を洗って、歯を磨いて、その日の飲み水を小さめのポリタンクに汲んで。およそ軽井沢のイメージからほど遠いではない。しかし軽井沢といっても別荘地から離れ、浅間山にぐんぐん登っていった最後の人家が朗読館なのだ。冬は特に、大変だ。今年

の冬は平地の図書館へ通うのに、もはや余生で、退職後朗読館を拠点に朗読の楽しさを広める活動をこなしてきた。信州各地で採れる豊富な物産をテーマにして、収穫祭と朗読会をドッキングさせたようなお祭り「信州朗読駅伝」を長野県各地の図書館の力を借りて今展開している。いつのまにか信州発の市民運動に育って、これから全国展開していくところだ。また「朗読で元氣をつなぐプロジェクト」も、全国各地で取り組んでいる。

乳がんなど同じ慢性疾患を持つ人たちの朗読ワークショップで、グループを組んで輪読し感想を分け合う。それだけのことだが、あまりによいデータが出てきて驚いた。体験的に分かっていたが、国立がんセンターと三重大学医学部が研究テーマとして取り上げ、学会発表になった。文学作品の力をかりて自己を高める作用が起こり、精神的改善を生むという、いい循環が始まる。



軽井沢朗読館での朗読会

それにして青春時代の教師と生徒、生徒と生徒がぶつかることよって生まれる作用、啓示が、どんなに大切か、その後の人生に与える影響がいかに大きいかわ、じゃがいも先生とともに思い出すのである。



青木 裕子(あおき ゆうこ) 一般社団法人軽井沢朗読館館長、朗読家、元NHKアナウンサー、軽井沢町立図書館館長、津田塾大学国際関係学科卒業後NHKに入局。「NHKニュースワイド」をはじめキャスターやリポーターとして活躍し、2010年定年退職。現在は朗読をライフワークとし活動中。日本点字図書館評議員。

去る9月12日、学士会館にて第9回サロン・ド・修猷が開催されました。一昨年の「言葉」、昨年の「食」に次いで今回選んだテーマは「コミュニケーション」。「ココロの動かし方」と題して電通エグゼクティブ・クリエティブディレクターの高崎卓馬氏(昭和63年卒)による講演を行いました。とはいえサントリ「オレンジーナ」や明治「キシリッシュ」など様々な広告を手がけた高崎氏のこと、単なる「講演」では終わりません。CM映像をふんだんに使った高崎氏のロジカルかつ軽妙な解説、「情報は欠けている方が強い」と語る高崎氏に、ご参加いただいた皆様も十分ココロを動かされたと思います。

* Salon de 修猷 * 第9回 「ココロの動かし方」

修猷館のキャッチコピー「を披露する第2部では爆笑に次ぐ爆笑!」大学より有名な「修猷館」や「日本のスタンフォード」修猷館」と「自分で言うな」とツツコミたくなるコピーや「男」修猷館「女の子」修猷館「それに女の子」修猷館「奇跡的にコロラレションしたコピーなど、高崎氏も舌をまく名珍コピーの連続。そして高崎氏が選んだグランプリは、「ぼくたちに卒業はない。修猷館」(平成7年卒・入江信吾氏作)と「本物しか知らない」修猷館(平成17年卒・松延朗子氏作)



倉本達人 梅壱昌子 (昭和63年卒) 陸奥三

スクリーン いっぱいの夏 中川 美穂 (昭和61年卒)

昨年8月1日、学士会館にて東京修猷会「なつやすみの巨匠」特別上映会を開催し、250名の方々に観覧頂きました。この映画は5月の二木会講師、H7年卒で脚本家の入江信吾氏の手によるもの。その際、予告編で能古島の自然や懐かしい博多弁に癒され、少年の恋の行方、配役の妙に心踊らされましたが、上映は福岡のみ。「東京で観たい」という館友の強い要望を受け、東京修猷会が初めて上映会を開催することになった次第です。

2015年9月27日(日)、千葉県山武グリーンカントリー倶楽部にて、松本陸彦さん(昭和39年卒)のご厚意の下、第36回二木会ゴルフコンペが盛大に開催されました。今大会には女性7名を含め45名、12組と過去最多のメンバーが参加。スタート時には、降り続いていた雨も昼過ぎには止み、白熱したプレーが繰り広げられました。

優勝は初参加の坂原祐樹さん(昭和57年卒)、準優勝は山下環

去る平成27年9月19日(土)から21日(月・祝)、修猷館ラグビー部創部90周年記念事業の一環として、同部の関東遠征が実施



ラグビー部創部90周年記念関東遠征 藤田 晴信 (平成2年卒)

去る平成27年9月19日(土)から21日(月・祝)、修猷館ラグビー部創部90周年記念事業の一環として、同部の関東遠征が実施

実施された関東在住OBによる激励会では、現役生が熱い抱負で応え、最後は館歌斉唱で締め括る盛会となりました。関東在住OBも間近で現役生の活躍を感じる機会が、世代を超えた貴重な交流ができたと思えます。



東京修猷会総会企画

「WW館歌」で繋がった修猷魂

WW館歌とは

昨年の東京修猷会総会の学年企画「WW館歌」は、まさに「修猷魂」の象徴である館歌を、世界で活躍する館友達がワンフレーズずつ歌い繋ぎ、一つの作品として完成させる企画でした。世界24カ国、合計66人の館友達、そして現役生に登場して頂き、世代や国境を超えて歌い繋ぐ館歌によって修猷スピリットを繋いでくれました。

本特集では、WW館歌に参加下さった方から、14名の方に現在のご活躍の様子や撮影時のエピソードについてご寄稿頂きました。



る世界の館友 るに修猷人~



河野 孝史 (平成13年卒)



な歴史という共通点があると考えたからです。撮影にあたっては、目の前を通り過ぎて行く一般の観光客から注目を浴びました。しかし、館歌を歌っているうちに快感に変わりました！

現在、カリフォルニア大学サンディエゴ校の国際関係学修士課程に留学をしています。

今回撮影を行ったのは、カリフォルニア州ヨセミテ国立公園の滝「Lower Yosemite」の前です。撮影場所としてこの滝を選んだのは、アメリカの自然と修猷館には、雄大

星の徽章よ永久に



幸重 秀則 (昭和57年卒)



こちら台湾には、会社の業務により駐在しています。撮影場所は、台北にある八里自転車専用道路です。サービスエリア等の設備の整った自転車専用道路、与那国島の隣と言われれば納得できるマンダリン林は、旅行などでは判らない台湾の良さと思います。どうせやるならと思いつき、「修猷魂」Tシャツを着て、イエロー時代の鉢巻をして本番に臨みました。マンダリンが海に沈む満潮時を狙うと昼の人通りが多い時間帯に

なりました。今回は、本物さながらに応援団式で大声で「うっす！館歌よおいっ！！」から入ったため、通りすがりの人達に怪訝そうな顔をされました。歌っている時は気合が入っていて気が付きませんでした。終わりの片付けの間が恥ずかし。撮影用のスマホや、館歌の歌詞カードを街路樹から外したり…。自転車ではしばらく走って



池田 紀子 (昭和63年卒)



現地の方と結婚し、ロサンゼルス滞在15年になります。撮影場所は、カリフォルニア州ロサンゼルスにある南カリフォルニア大学のキャンパス内です。撮影当時、本大学の大学院(法学部)に通っており、授業の合間に撮影しました(その後、卒業しました)。

今回、大学キャンパス内で、ソロで館歌を熱唱しましたが、快感でした。周囲にガ見されましたけど…(笑)。

今回WW館歌に参加された皆さんも多分同じような体験をされて、今回の作品が仕上がっているのかと思うと、色々な思いが詰まった作品だと感じます。



下池 剛 (平成7年卒)



現在、企業の派遣員(駐在員)としてサンディエゴに滞在しています。

今回撮影を行ったのは、カリフォルニア州でも有名なゴルフ場、2008年のUS Openでタイガーウッズが劇的優勝を果たしたコースです。一緒に撮影した榎木野先輩は撮影の直前に突然誘いましたが二つ返事で快諾頂き、共に久方ぶりの館歌熱唱に浸りました。そしてスコアは…。

中国には、もともと教育支援を行うNPO法人の仕事で参りましたが、現在は結婚して大学で日本語を教えています。



中洲 慶子 (平成17年卒)

今回の撮影場所は、雲南省にある民族村の入口です。雲南省と言えば少数民族が有名で、この場所を選びました。今回撮影した映像を見て、初めて3番の歌詞を間違えていたことに気づきました…。勉強し直します！

猷を修むと名に負ふも



佐藤 奈緒 (平成18年卒)

現在、社員30名の、人材紹介会社のCEOとして働いています。カンボジアであれば、20代でも勝負ができると思いき、カンボジアに渡りました。

撮影したのは、プノンベンにあるオフィスのテラスです。本日は王宮やお寺の前で撮ろうと思っていたものの、仕事で忙しくしているうちにメ切が来てしまいました(汗)。日本人スタッフにお願するのでも恥ずかしく、結局カンボジア人スタッフに依頼しました。



宗像 大五郎 (平成6年卒)



ジャカルタには、駐在員として赴任しております。今回撮影したのは、ジャカルタのアパートメントにある共有スペース(庭)です。メンバーが揃う時間がとれず、御自宅のお庭を使わせてもらいました。ジャカルタは自由な移動が非常に困難な街で、娯楽はアパートのプールや週末のゴルフくらいしかありません。そこでゴルフ場でも撮影したのですが、残念ながら採用にはいりませんでした(涙)。キャディーさんに撮影してもらいましたが、ビツクリされていました。



館歌でつながる ~こんなところ

 イギリス
ケント州

寺岡 隆宏
(昭和52年卒)

2年前に資本提携(企業買収)した英国の会社との円滑統合、経営補助のためにこちらに赴任しています。現在は、同社、イタリアの会社と出向元の会社の3社によるJ.Vに再出向しています。

今回の撮影地は、イギリス・ケント州にある、カンタベリー大聖堂(1070年頃より建造された世界遺産)です。当地までドライブしようというところで、家族で訪問したところ、素晴らしい天気にも恵まれ、また、ビデオを撮ってもそれほど恥ずかしくない状況だったので、ここで決行しました。

3月のある日突然、総会担当幹事学年の梶栗君よりメールを受領。なんと、東京修猷会の元幹事長であった甲畑真知子先輩より当方を紹介されたところ、これは断れませぬ。それに



夫の仕事(P&G社)の関係で、2005年からスイス、ジュネーブに在住しています。昨までは私も同社で勤務していましたが、現在はフリーランス兼主婦で、2人の娘の母です。

 スイス
ジュネーブ

大熊 美雪
(昭和62年卒)



今回の撮影地は、自宅近所の(晴れていたら)モンブラン、レマン湖が展望できる丘です。本日はジュネーブの大噴水が、モンブランのスキーゲレンデから、降り注ぐ太陽のもとで撮りたかったのですが、ずっと雨模様で、結局近所のお気に入りの場所を選びました。

まず館歌を暗唱するのに時間がかかり、自分の記憶力の悪さを痛感し、やっと覚えて録画に入りましたが、あまり人気のない所と聞いていてもいざ録画を始めるのと結構物音が入ったり、車が通ったり。でもやってみるととても懐かしい思いで心がポツと暖かくなりました!



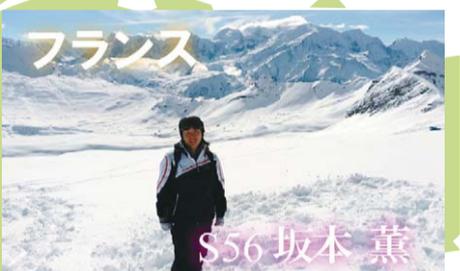
今回の撮影は、トルコ・イスタンブールの自宅ベランダで行いました。「館歌は力一杯歌うもの」が染み付いており、自分が歌うのは構わないが、何処で?色んなスポットを考えましたが「力一杯」が若干障害になりました。ボスフォラス海峡、ブルーモスクなど考えましたが、撮影協力者の女房が「結局自宅となりました。これでも通りますが、人々に見つめられました。

国際公務員として国連で働く主人に伴って1995年からジュネーブに滞在しています。今回の撮影地は、フランス・フレーヌスキー場の頂上でモンブランをバックに。ジュネーブの街中からも見えるモンブランの風景は第二の故郷のような存在です。不動の逞しさ、修猷魂に似ているかもしれません。モン

 フランス
フレーヌ

 (スイス・ジュネーブ在住)

坂本 薫
(昭和56年卒)



「ここでやっちゃえ!」と気が変わり、息子にiPhoneで撮ってもらった次第です。ただ現役のみなさんみたいな大声で歌うことはできず、そつと歌ったので歌声はあまり聞こえなかったでしょうね。

 フランス
パリ

橋本 明
(昭和41年卒)

日本、米国(ニューヨーク)及びフランスの弁護士資格を有し、1992年以降パリで弁護士事務所を開業しています。撮影場所は、パリ、セーヌ川を挟んで、エッフェル塔と向き合う高台にあるトロカデロ広場です。パリといえば、エッフェル塔を外すわけには行きません。私の事務所の近くなので、余り人がいないと思われる早朝に行きましたが、有名な観光地であり、それでも結構人がいて、恥ずかしいので余り人目に付かず、かつエッフェル塔が写る場所を選ぶのに苦労しました。



こちらには、企業派遣で赴任しています。今回の撮影は、トルコ・イスタンブールの自宅ベランダで行いました。「館歌は力一杯歌うもの」が染み付いており、自分が歌うのは構わないが、何処で?色んなスポットを考えましたが「力一杯」が若干障害になりました。ボスフォラス海峡、ブルーモスクなど考えましたが、撮影協力者の女房が「結局自宅となりました。これでも通りますが、人々に見つめられました。

 トルコ
イスタンブール

亀岡 友樹
(昭和50年卒)

 インド
コルカタ

金満 秀和
(平成16年卒)



現役生による「吾等が使命を果たしてん」でエンディング

現在勤めている会社のインド拠点立上およびインド顧客向け技術営業を行うためこちらに滞在しています。今回の撮影地は、インド・コルカタにあるヴィクトリア記念堂正面入り口です。ヴィクトリア記念堂は、英領時代インドの首都であったコルカタにおいて、最も美しく、その時代を象徴する建物です。

吾等が使命を果たしてん
観光客の多い土曜日に撮影したため、多くの観光客多数がインド人に見られながら館歌を1番、2番、3番と歌い上げました。撮影中にインド人が前を横切ったり、撮影していた知人(インド人)が撮影中にじわじわと私に寄り、大事なヴィクトリア記念堂がフレームから外れたり。結局ちゃんと撮れていたのは3番だけでした。

WW館歌制作裏ばなし

制作担当 清水 御冬(平成元年卒)

私が実行委員長の梶栗君から「総会で映像を流したいので協力してくれ」と連絡を受けたのは去年の1月のこと。私がテレビ番組を作っている、という話をどこかで聞いたのでしよう。白、と思ったからです。しかしその会議のあと、秋、私は2ヶ月ほど日本を離れます。そして冬は3・11震災特番に忙殺され、ようやく実行委員会に復帰できたのは3月中旬以降です。そこから高校側と応援歌練習の撮影交渉をし、4月には仕事をキャンセルして福岡に行つて応援歌練習の様子を撮影しました。久々に見た応援歌練習は本当にインパクトのあるものでした。そこでは福岡在住のガンガン会の仲間撮影を手伝ってもらいました。みんなよく協力してくれる!一方、実行委員会のメンバー

「総会で映像を流したいので協力してくれ」と連絡を受けたのは去年の1月のこと。私がテレビ番組を作っている、という話をどこかで聞いたのでしよう。白、と思ったからです。しかしその会議のあと、秋、私は2ヶ月ほど日本を離れます。そして冬は3・11震災特番に忙殺され、ようやく実行委員会に復帰できたのは3月中旬以降です。そこから高校側と応援歌練習の撮影交渉をし、4月には仕事をキャンセルして福岡に行つて応援歌練習の様子を撮影しました。久々に見た応援歌練習は本当にインパクトのあるものでした。そこでは福岡在住のガンガン会の仲間撮影を手伝ってもらいました。みんなよく協力してくれる!

一方、実行委員会のメンバー



界中の館友の皆様、本当に有り難うございました!そしてガンガン会のみならず「お前ら最高!」

2年連続日本一。 福岡の熱い男達がやりました!

新井 仁(平成元年卒)

熱男

10月29日、福岡ソフトバンクホークスは2年連続の日本一を達成。工藤公康監督が胴上げされ9度宙に舞いました。

ホークス球団は1938年に創立されましたが、福岡に球団が移って4半世紀が経ちました。福岡移転後初めて日本一を達成したのは1999年。リーグ優勝の時、王貞治監督、秋山幸二キャプテン、工藤公康投手の順で胴上げが行われましたが、3人はホークス優勝監督として、その順で胴上げをされた訳で、今年の胴上げは予言されていた?と周囲では話をしています。今シーズンの勝因は、高い戦



写真提供:福岡ソフトバンクホークス

し、他球団とは一線を画したユニークな年間スローガンを打ち出しています。今シーズンのスローガンは「熱男(アツオ)」。この「熱男」という言葉をファンも選手も唱え、シーズンを「熱く」一丸となって戦いました。今年のレギュラーシーズン観客動員数は253万人。これは巨人、阪神に次ぐ数字で、福岡より大きな名古屋を本拠地とする中日を5年連続で上回りました。

福岡移転以降ホークスは他球団に先駆けて地域密着を目指した様々なアイデアを打ち出して来ました。この地域密着の考えは今や球界全体に広がっています。その一つがユニフォーム配布イベントです。ホークスでは7月に「鷹の祭典」としてドーム来場者全員に特別ユニフォームをプレゼント。選手もこの特別ユニフォームを着て試合を行います。また期間中はタクシーや公共交通機関の乗務員・スタッフの方、航空会社の空港スタッフの方、小売店や銀行の職員の方々もこの特別ユニフォームを着用して業務にあたってくださいます。鷹の祭典は福岡の街全体でホークスを応援して盛り上がるという一大イベントで、ある意味真剣にどんたく、山笠、放生会に次ぐ福岡の4大祭りになれるよう頑張りたいと考えています。

さてこの鷹の祭典、3年前から東京でも1試合行われています。今年も福岡ヤフオクドームより大きな東京ドームがほぼ満員になる程多くのホークスファンが詰めかけてくださいました。スタンドでは博多弁を耳にするのも多く、福岡・九州にゆかりのある方々がホークスを観に集まってくれた事に感激したと同時に、東京にホークスを応援

食文化を通じて、伝統を大切に 地域に立脚した企業として貢献する

松村 等彰(昭和35年卒)



江戸時代より使用されている仕込蔵の木桶

はからずも、親しい後輩からの依頼を受け、何かのお役に立てばとの思いより、引き受けた次第です。

標題は弊社の企業理念であります。御陰様で、昨年福岡の城下町大名の地で創業し、160周年を迎えました。今も続く日本の伝統的食文化である、醤油、味噌を生業として安政2年から、明治、大正、昭和、平成と幾多の困難を乗り越えてこられたのも、多くの方々のご支援のおかげであるとあらためて感謝しているところです。

福岡を本の街に

池田 雪(平成4年卒)

毎年秋季に開催されている「BOOKIYOKA(ブックオカ)」という本のお祭りをみなさんご存知ですか?2006年より「福岡を本の街に」というテーマで、書店・出版社・古書店・編集者などに本に関わる人々や本好きが集まって、様々なブックイベントを行っており、2015年で第10回を迎えました。



けやき通りでの一箱古本市の様子

始まりは、2005年に東京の不忍で行われた「一箱古本市」を福岡でもやれないか、というブックスキュープリックの大井さんの一言。その言葉に賛同し、集まったメンバーで実行委員会が結成され、11月3・5日の3日間の本のお祭りが福岡でも開催されることになりました。福岡にある小さな出版社・書肆侃侃房の編集者であった私にも声がかり、本のイベントって、楽しそうと第1回から参加することに。イベントは「けやき通り一箱古本市」をメインに、書店

達醬油が代表です。やや辛口ですが、最高レベルの逸品です。現在、生産の70%を22年前に建設した糸島市の第二工場まかなっています。雷山の伏流水をふんだんに使える、恵まれた環境の中、近代設備を整え、将来に向けた工場となりつつあります。これからは160周年はひとつの通過点としてとらえ、伝統を守りながら革新を続け、福岡の文化を世界に発信したいと願っています。

最後に、東京修猷会の皆様のご活躍とご健康を祈ります。(まつむらとしあき/株式会社ジョーキユウ 代表取締役社長)

せでお届けするというもの。統一の帯を作成し、大きな書店から小さな書店まで、それぞれ売り場を工夫してフェアを行っていきます。普段はクールな書店員の一面が垣間見られるのも楽しいものです。もう一つ、書店のイベントで毎年好評なのが、書店で文庫を買った方にブックオフ期間中だけ配られる、「ブックオフ特製文庫カバー」。リリー・フランキー、荒井良二、西原理恵子、宇野重吉、supera supera、ミロコマチコなど、他県から問い合わせが入るほどの人気。角田光代、田中慎弥の書き下ろしの手書きエッセイをカバーにした年も。トークイベントも、実行委員

者がブックオカに呼びたい!と思う作家などに直接アプローチして来ていただくなど、このイベント、何よりブックオカの実行委員が自分たちで楽しんでやっているのが、特徴です。公式パンフに載せる広告集めから自分で自分たちで行い、ボランティアベースでの運営ですが、本に対する熱い思いが、こうやって続けてこられた原動力となっているのです。ブックオカも10回はまた新しい形で運営していくことになりそうです。これからも、「福岡を本の街に」の思いで、福岡を盛り上げていきたいです。(いけだゆき/書肆侃侃房 編集者)

全国藩校サミット@福岡

藩校教育の伝統と精神を生きし引き継ぐ。第13回全国藩校サミット福岡大会が平成27年10月3日に開催され、福岡の藩校関係者を中心に全国から1500名が参加しました。

石川忠久氏(漢学文化振興協会会長)による記念講演「九州と漢詩」では、金子堅太郎の詩業として漢詩8首を紹介。旧藩御当主紹介では全国32名の当主が登壇され、代表で徳川恒孝氏(徳川宗家第18代当主)のご挨拶がありました。

講演師神田紅氏(S46年卒)による映像と語り「藩校の歩みと金子堅太郎」では、金子の半生を紹介。彼は11歳で藩校修猷館に入学後、ハーバード大学留学を経て明治憲法起草や不平等条約改正に心血を注ぎました。また、藩校修猷館が廃藩置県によって廃校になった後、英語専修修猷館として再興できるよう奔走。外交でも手腕を発揮、深い友情が縁となったセオドア・ルーズベルト大統領の仲介により日露戦争を講和に導くなど、近代日本の基礎作りに尽力しました。

パネルディスカッションでは本大会のテーマである「グローバル時代を拓く藩校の息吹」について、川崎隆生氏(S44年卒、西日本新聞社代表取締役社長・同窓会副会長)をコーディネーターとして、3名のパネリストによる講演が行われました。清田昭氏(S39年卒、株日本取引所グループCEO・東京修猷会副会長)は「日本の証券市場における外国人比率が高まっており、市場自体の国際標準化が求められる」「藩校で学んだ人はリーダーとなるべき人物であった。館歌の『皇国の為世の為に』の精神は、個々の自意識と独立性を高め、これは修猷魂に繋がる」と熱弁。宮本雄二氏(S40年卒、宮本アジア研究所代表、元駐中国特命全権大使)から「相手を知り相手にわかる言葉と理屈で説明し、納得させる知識と技術を身につけて個を確立する。そして公のため皆のために働く、そのような人格を育てるのが藩校教育であった。和魂洋才も基本となる価値観は今も昔も変わらないはず。伝統的価値観は普遍で繋がるもの」とのコメント。津田純嗣氏(S44年卒、安川電機代表取締役会長兼社長)からは「私も海外市場の拡大を行っているが、仁義礼海外へ派遣しているが、日本人を育てるには多くの日本人を育てる必要がある」と話した。今では多くの日本人を海外へ派遣しているが、仁義礼



第13回全国藩校サミット福岡大会
—グローバル時代を拓く藩校の息吹—



サミットを終えてにこやかな表情の久保田勇夫氏(左)と東京修猷会副会長 清田昭氏(右)

「これは修猷館の精神に繋がる」と母校の教えが経営に活かされている話も披露され、聴講者が強くうなづく場面も。

福岡宣言として本サミット実行副委員長である橋田紘一氏(S36年卒・同窓会副会長)が「藩校スピリッツ」と和魂洋才の精神を未来にわたって教育の場に醸成することを目指し、その活動を積極的に支援すること」を採択。最後に、次期開催地の丸亀藩へサミット実行委員長の久保田勇夫氏(S36年卒・同窓会会長)から、引継書が手渡されました。

サミット終了後に清田氏にお話をうかがうことができました。「まず驚いたのは藩校サミットの盛大さ。藩校は日本の教育水準を高めたといわれるが、土族の学校だから当然リーダー層の教育であつたらう。修猷館の先輩に偉人が多く存在することを改めて知るとともに、私財を投じて長く支援を行っていた黒田家の教育に対する熱意に驚いた。日本がアジアでも近代化に成功し西洋と並ぶことができた礎に教育が地盤になっていたのを感じた。国としては国のリーダーを作るための教育が必要だと思ふ。みんな平等で競争のない教育ではリーダーは育たない。修猷館は勝手気ままである反面、いつの間にか自主独立、自己責任の意識が育っていた。そのような人たちが九州のリーダーとなり、日本のリーダーに育ってもらいたい」

改めて教育の大切さと普遍的な価値観、そして個と公を顧みることができるようになりまし

た。

智信の精神を重んじている。部下を育てる際は、自由闊達だけでなく、使命感ももっている。



1988年、昭和最後の運動会を経験した夏から20数年。親の視線、そして、OB、OGの視線で修猷大運動会の今を追った。

「時代は変わったな」。Tくんの正直な感想だった。タンプリングの華「7ピラ」。今は、大人数で脇から支える役目もある。支え役に回った2年生の息子さんは「7ピラ立った!」と大喜びだが、かつてを知るTくんは「これも時代の変化か」となんとなく寂しそう。

一方で、分刻みで進むブログラムは昔のまま。運営委員会はお揃いの緑ブロックTシャツに身を固め、全体エールでは、各ブロックのエール長に混じって運営エール長が演舞していた。「やるじゃないか。元運営委・総務のTくんは、自分たちの頃にはなかった一体感のある後輩達の取り組みにうなづいた。女性の社会進出が推奨されるなか、修猷女子も躍動している。「男子が5人に減った!」。2年生の娘さんが通うYくん。女子が増えたエールの布陣に驚愕している。夏休みも練習に明け暮れた娘さんの本気度に嬉し

い。新入の美・技が融合した。先輩たちの晴れ舞台が、心地よいひとときを過ごさせてくれた。

「運動会編」

課外活動編

秋晴れの絶好のゴルフ日和のなか、テレビ西日本主催第5回福岡県高校OB・OGチーム対抗ゴルフ大会が、福岡カンツリー倶楽部和自コースで平成27年9月26日に開催された。

修猷からは「どしてんこしてん」チーム(剛賀会、S57年卒。高島、水野、桃島、高崎)と「ガンガン会暫定代表」チーム(ガンガン会、H元年卒。只限、今泉、寺山、藤田)の2チームが参加した。参加総数は抽選で選ばれた43校50チーム、当初ガンガン会は抽選で落ちたが、辞退したチームが出たため次点で参加することとなった。

優勝は三池高校、2位は東海第五、3位は戸畑高校。表彰式でサイゼリアを利用したり、サーティーワンやカレーの重橋で学生特典を活用したり、現役生のコストパフォーマンス重視の西新事情がうかがえました。

一方、私たち世代では、「ストロベリーフィールズ」と「珈琲の伊藤」が女性陣の思い出のお店としてあがりました。「先輩に連れて行ってもらった。大人になった気がした」や「デートで利用した」などのエピソードから、甘酸っぱい青春の思い出がたくさん詰まった代表格のお店といえてよさそうです。男性陣からは、お好み焼きの「ふきや」や「ラーメンみち」、男女を問わず「蜂蜜饅頭」という声が上がっていました。

そして、今回は、思い出の店「ストロベリーフィールズ」と「珈琲の伊藤」へ。変わらない雰囲気、気配がよみがえってきました。「珈琲の伊藤」では、先輩に偶然お会いするというオマケつき。福岡県外にお住まいの皆さまも、帰省等で西新を訪れる機会があったら、思い出の店を訪ねてみてはいかがでしょうか。

となった。ルールは1チーム4人で、ダブルベリアのNETスコア上位3名の合計点で競う。優勝校は賞品の沖繩ゴルフ旅行に加え、ステージで校歌を歌う名誉が与えられる。剛賀会作成のハンディホール予想とコース攻略ガイドで予習もバッチリ。もし2チームのどちらかが優勝したら全員でステージに上がって館歌を歌おう!と気合十分で臨んだが、表彰式は八仙閣本店で行われ、結果は残念ながら剛賀会が18位、ガンガン会は31位と日頃の実力を出せずに不完全燃焼となった。

来年こそは優勝してステージで館歌を歌い、テレビに映るぞ!と雪辱を誓いながら、二次会に消えていく修猷チームであった。

会場が一番よめいたのが、ドラコン賞、なんと嘉穂東高校OBで御歳73歳。推定飛距離260ヤードと脅威のドラコンだった。

スタート前、余裕の表情をみせていた修猷メンバー



スタート前、余裕の表情をみせていた修猷メンバー

寄り道編

私たち平成元年卒が、憧れの六光星の制服を身に纏い、それぞれ志を抱いて勉学に励んだのはおよそ30年前。今では、子どもが修猷館に入学したという「親子2世代修猷生」も誕生し、時の流れの早さを痛感するこの頃です。西新周辺も、随分と変わりました。当時のまま続いているお店を探さうが難しいかもしれません。そこで、今回は現役生と卒業生に「お勧め&思い出のお店」の聴き取りを行い、今ドキの西新を久しぶりに巡ってみました。

現役生のほぼ全員からお勧めとしてあがっていたお店は、「ワタナベナンバン」。2013年に宮崎から移ってきた、チキン南蛮サンドが名物のこぢんまりとした可愛らしいお店です。部活帰りや運動会の後に現役生は集ってお喋りしている模様。他には、テスト勉強やクラス会な

どでサイゼリアを利用したり、サーティーワンやカレーの重橋で学生特典を活用したり、現役生のコストパフォーマンス重視の西新事情がうかがえました。

この見開き2頁は、福岡からクスの「熱男」にちなんで「福岡を熱くする人と事から」をテーマに、こちらの頁は「修猷館の今昔。編集担当の私たちが母校へ通う人も、気付くと二世が母校へ通う人も。また、今年には福岡を会場に全国藩校サミットが開催された年でもあり、時間的な要素を組み込んでみました。修猷館の今、そしてちょっと前、遙か昔。

みなさんの時間軸と照らし合わせながら、福岡を思い出していただければと思います。

この見開き2頁は、福岡からクスの「熱男」にちなんで「福岡を熱くする人と事から」をテーマに、こちらの頁は「修猷館の今昔。編集担当の私たちが母校へ通う人も、気付くと二世が母校へ通う人も。また、今年には福岡を会場に全国藩校サミットが開催された年でもあり、時間的な要素を組み込んでみました。修猷館の今、そしてちょっと前、遙か昔。

みなさんの時間軸と照らし合わせながら、福岡を思い出していただければと思います。



現役生に大人気のチキン南蛮サンド

歴史と伝統を支える無数の星

第三十一代館長 江口 善雄



周辺樹木とさり気なく調和する本校正門付近や館長室横の花壇は、一年をとおして四季折々の花々に彩られており、修猷関係者のみならず、地域の皆様にもその美しさを提供してくれています。そして、この花壇を丹精込めて手入れしてくださっているのが「修猷なでしこ会」(卒業生のお母様及び在校生のお母様の有志)の皆様です。しかも、花壇の植え替え時には、「登竜門」や「4つの修猷」等、様々なテーマを掲げて植栽デザインされた、修猷への愛情を感じる芸術性に満ちた花壇であり、修猷への応援花壇でもあります。さて同窓会の皆様には、常日頃から本校の充実と発展に多大なご支援・ご協力を戴き、心から感謝申し上げます。皆様の母校修猷館高校は、4世紀にも跨り脈々と継承される歴史と伝統に裏打ちされた、同窓生の並々ならぬ母校愛と云う崇高な理念の世界のみならず、社会で活躍する数多の同窓生の後ろ姿に学び、志を高く掲げる在校生に恵まれ、文武両道の魅力的な学校として益々その存在意義を高めています。



「アメリカの独立宣言に遅れること僅か8年、そしてフランス革命に先立つこと5年、時、1784年。我が国では天明4年である。中略。嘗ての藩校は、

昭和42年卒 学年便り

土井 芳夫 (昭和42年卒 常任幹事)

我々は昭和42年戦後第19回の卒業に因み、また「共に生きる」という思いで「一九猷会」の名前で同窓会活動を行っていました。もうすぐ卒業50周年を迎える我々は、昭和23年と24年早生まれでまさに団塊のど真ん中の世代です。高校時代は56人の10クラスと収容能力一杯の寿司詰め状態を経験しました。他の学年と同じ様に、学年幹事を担当した25年前から集まりを持ちはじめ、ここ数年は毎年秋に懇親会を開いています。最近では定年退職後の福岡へのUターンもあり減りつつあります

が、関東地区にはまだ150名近くの会員がおり学年全体の3割近くを占めています。昨年は10月18日(日)17時からホテルグランドアーク半蔵門で「東京一九猷会」懇親会を開催し31名が集まりました。会食懇談後クラス単位に個人ごとの近況報告があり、欠席者(51名)の返信コメントも紹介され、80名強の会員の近況が報告されました。現役継続者はそれぞれの分野でますます元気に活躍しており心強く感じられました。また退職者も、新たな習い事、昔の趣味の深掘り、ボランティア活動、新たな資格への挑戦など、それぞれ自由な時間を満喫している様でした。最後に恒例の館歌と応援歌を斉唱。いつものことながら高校時代に戻ったような懐かしさもありつつあります。皆

幹事長就任のご挨拶

より身近な東京修猷会を目指して



松尾 隆広 (昭和54年卒)

昨年の総会より土肥幹事長の後任として幹事長に就任しました昭和54年卒の松尾です。このような大役を仰せつかり身が引き締まる思いです。私は学年幹事を務めた後、平成18年から執行部に加えていた二木会を中心に副幹事長を務めておりました。一昨年の総会にて執行部の世代交代の必要もあり退任致しましたが、その年の秋に大須賀会長より幹事長就任

を打診され、仕事との両立の不安もありましたが、母校への恩返しのつもりでお受けすることにしました。東京修猷会もこの10年余りで、歴代の会長や幹事長を始めとする役員の方々のご尽力の陰で、平成卒を始め若い世代の方の参加も増え活気が出て来たように感じます。今後は、様々な活動を通してさらに若い世代の参加を増やし、世代を超えて交流を深め、皆さんにとつて有意義で、より身近に感じられる東京修猷会を目指して尽力したいと思います。館友の皆様のご支援ご協力のごほど宜しくお願い申し上げます。

2015年度寄付金

2014年11月1日から2015年10月31日までに多数の皆様からご寄付いただきました。ありがとうございます。お礼の意味を込めてお名前を掲載させていただきます。(敬称略・卒年別)

また、年会費の納入をまだ済まされていない方は、振替用紙にて郵便局やコンビニからご送金くださるようお願い申し上げます。詳細は同封の案内書をご覧ください。

郵便為替 口座番号 00170-6-172892 東京修猷会事務局

- (近畿事務局長)林田 三生、(本部事務局長)田中 雅美、(館長)江口 善雄、(昭9)富田 明徳、(昭12)宮川 一二、(昭19)田尻 重彦、(昭19)毛利 昂志、(昭20)野上 三男、(昭22)増崎 昭夫、(昭23)吉田 良一、(昭23)田尻 利重、(昭24)安藏 復也、(昭25)山本 義治、(昭26)小西 正利、(昭26)中村 道生、(昭26)藤吉 敏生、(昭26)常岡 宏、(昭26)廣瀬 貞雄、(昭27)和栗 真次郎、(昭27)金田 久仁彦、(昭27)福田 純也、(昭28)田中 憲明、(昭28)吉見 健三、(昭28)児玉 黎子、(昭28)梅本 章夫、(昭29)村越 登、(昭29)内田 素子、(昭30)田中 栄次郎、(昭30)堤 正、(昭31)高崎 洋一、(昭31)近藤 徹、(昭31)村田 和夫、(昭31)中村 保夫、(昭31)影山 滋、(昭31)箱島 信一、(昭32)鳥居 健太、(昭32)平野 照幸、(昭32)内藤 武宣、(昭32)國分 英臣、(昭32)和田 聿生、(昭32)井上 智晴、(昭32)林 克己、(昭33)河野 美和子、(昭33)貫 隆夫、(昭33)武石 忠彦、(昭33)米倉 實、(昭33)寺澤 美和子、(昭33)大西 正俊、(昭34)行武 賢一、(昭34)岩田 龍一郎、(昭34)讚井 邦夫、(昭35)江川 清、(昭35)小野 勝利、(昭35)可見 晋、(昭35)伊藤 洋子、(昭36)松永 茂、(昭36)半田 雄司、(昭36)安藤 誠四郎、(昭36)濱地 康彦、(昭36)土井 高夫、(昭37)大須賀 頼彦、(昭38)渡辺 紀大、(昭38)蟹江 脩、(昭38)並木 徹、(昭38)上田 茂、(昭39)久保田 康史、(昭39)松本 陸彦、(昭39)高橋 登世子、(昭39)井島 資邦、(昭39)久保田 康史、(昭40)山形 紀明、(昭40)由良 範泰、(昭40)泉 和雄、(昭40)井上 浩、(昭40)棚町 精子、(昭41)森田 澄夫、(昭41)恒松 芳一、(昭41)高尾 義行、(昭41)安田 修之助、(昭41)木川 理二郎、(昭41)有山 賢良、(昭42)井上 友二、(昭43)宮地 徳文、(昭44)横田 勝介、(昭44)安川 裕行、(昭44)甲畑 真知子、(昭44)坂井 真知子、(昭44)川崎 宗二、(昭45)東原 克行、(昭45)本田 由紀子、(昭46)土肥 研一、(昭46)栗山 英俊、(昭49)鶴本 隆之、(昭49)橋村 秀喜、(昭49)井手 富士雄、(昭49)山本周、(昭50)小林 みどり、(昭50)野中 哲昌、(昭51)油田 哲、(昭51)竹下 宏次、(昭53)濱田 正弘、(昭53)新納 康彦、(昭54)中原 誠也、(昭54)中原 滋、(昭54)松尾 隆広、(昭55)吉田 聡、(昭56)田中 昭人、(昭57)光宗 信吉、(昭58)井手 慶祐、(昭59)服部 豊、(昭59)白壁 勝栄、(昭60)朱雀 誉史、(昭62)田尻 公一、(平2)安永 則子、(昭43)学年寄付

編集後記

今号より、会報の編集担当は昭和卒から平成卒にバトンタッチいたしました。今号では、昨年の総会と同じく「時代は変わっても変わらないもの」不易流行」をコンセプトに編集を行いました。

時間を越えて引き継がれる「修猷魂」。それは、玉稿でも触れられている館歌や六光星に象徴されるものかも知れません。新年の幕開けにお届けする本会報が、皆様の心に根付く修猷魂を呼び起こす契機になればと思います。

末筆となりましたが、本会報の編集にご協力を下さいました皆様に厚くお礼申し上げます。

平成元年卒

会報編集担当一同

2015年 二木会

- 第607回 H27.1 『日本人の海外旅行の歩み50年』 二宮 秀生氏 (昭和55年卒) ㈱ジャルパック 代表取締役社長
- 第608回 H27.2 『強気の中国、弱気の米国』 用田 和仁氏 (昭和46年卒) 三菱重工(株)顧問 (元 陸上自衛隊西部方面總監)
- 第609回 H27.3 『辞書に映った漢字のかたち』 武田 京氏 (昭和58年卒) ㈱三省堂 出版局辞書出版部編集長
- 第610回 H27.4 『最近の市場動向の振り返りと日本取引所グループ(JPX)の取り組み』 清田 瞭氏 (昭和39年卒) ㈱東京証券取引所 代表取締役社長
- 第611回 H27.5 『映画製作のプロセスと業界の現状』 入江 信吾氏 (平成7年卒) 脚本家 (映画「なつやすみの巨匠」の企画・脚本担当)
- 第612回 H27.7 『ビールのアート&サイエンス~麦とホップが生み出すおいしさの秘密~』 渡 淳二氏 (昭和49年卒) ㈱サッポロホールディングス 取締役
- 第613回 H27.9 『ココロの動かし方~オリンピック・パラリンピック招致はどうして成功したのか』 第9回 Salon de 修猷 高崎 卓馬氏 (昭和63年卒) ㈱電通 エグゼクティブ・クリエイティブディレクター
- 第614回 H27.10 『芸術の秋に歌舞伎を楽しもう!~江戸時代の芸能と社会』 神田 由築氏 (昭和59年卒) お茶の水女子大学 基幹研究院教授
- 第615回 H27.11 『テレビでは言えない震災報道の真実』 清水 御冬氏 (平成元年卒) 天空メディア合同会社代表
- H27.12 忘年会 ※肩書・所属は講演時のもの